

本田和子著

子どもが

忌避される時代

少子化対策担当大臣が任命され、「エンゼルプラン」も繰り返されたが、少子化に歯止めはかからない。対策の発想が根本的に誤っていたのではないか。もっと長いタイムスパンで眺めれば、少子化は近代化の必然であり、保育行政や補助金だけで解決できないことは自明である。

子ども学の第一人者が家族、教育、都市、メディアなどから少子化現象に迫った力作である。「家の継承者」であれ「天皇の赤子」であれ、「公的」だった子どもの存在意義が戦前まで疑われることはなかった。しかし、家制度の解体により育児が「私的」行為となると、育児も「費用対効果」で語られるようになった。子どもが高リスクの投資対象として忌避されるのは自然である。

だが、子どもの消滅は人間の滅亡であり、その予感を生きたる希望を衰弱させる。それに抗して男女、母子、地域、世界の関係を再構築する「子どもの公共性」が提唱されている。(新曜社、2800円)

評者・佐藤 卓己 (京都大学准教授)

永谷健著

富豪の時代

平成になって「長者番付」の公開は廃止。明治22年から続く「日本紳士録」も今年で休刊になった。

江戸時代までは人間評価の尺度が身分だったが、近代社会では、それが富に変わった。しかも、誰がお金持ちかを見せる道具立てができた。長者番付と紳士録だ。

本書は「お金持ち」を研究した歴史社会学の本。長者番付と紳士録に着目し、近代日本の富豪を論じている。当初、財閥始祖たちは「奸商」よばわりされた。だが、そのうち実業にはげんだ「成功者」という扱いに変わっていく。また、彼ら富豪は自伝を出版して、こよさら勤儉を強調。茶道や能楽にはげむ趣味人の姿を演出し、華族と縁組をかさね、俗っぽい富者イメージを隠蔽する戦略をとったという。

長者番付なき平成日本。誰がお金持ちかも見事に「隠蔽」されたのか。とにかく、一時代が終わった感がある。(新曜社、3400円)

評者・磯田 道史 (茨城大学准教授)